
離れ行く三人

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離れ行く三人

【Nコード】

N1885Z

【作者名】

白波

【あらすじ】

組織の壊滅後、コナンと哀はそれぞれ新一と志保に戻り生活していた。コナンと哀が抜けた後も探偵団は活躍を続け高校生になり探偵クラブとして活動していた。そんな探偵団の三人が遊園地へ遊びに行ったとき歩美は怪しい取引を目撃してした。取引を見るのに夢中になっていた歩美はもう一人の仲間気づかず薬を飲まされてしまう。その薬は解毒剤の完成後なくなったはずのAPT4869だった。オリキャラがたくさん出てきます。

プロローグ

ここは東京駅の新幹線のホーム。このホームに元の姿に戻った新一と志保が立っていた。

「はい…じゃなくて…宮野…本当に行くのか？」

と新一が聞くと志保は

「ええ…確かに米花町あの町は暖かいし住みやすいわ…でも組織が壊滅したらかつてあきらめていた夢を追いかけたくなったのよ…私の事なら心配しないでいいわよ…いつそのこと忘れちゃっても恨まないわ…。」

と言った。

「忘れるわけねーだろ…お前は俺の大切な相棒なんだからよ！」

と新一が言うと志保はクスツと笑って。

「相変わらずね…それじゃあ…またどこかで会った時には忘れたなんて言わせないわよ…。」

と言いつつ残り新幹線に乗り込んだ。発車ベルが鳴りドアがしまる。ゆつくりと動き出す新幹線を見送った新一は家へと帰る前に毛利蘭がいるであろう探偵事務所に向かった。

新一も志保も…それだけではなくFBIの面々もこの時は組織は完全に壊滅したと信じていた。

それから10年もの月日がたちその考えが甘かったと痛感させられるのだった。

10年もの間に組織の間は深まりより多くの人を巻き込んでいくこととなるのだ…。

なぜこの時にAPT X4869がすべてなくなったのか確認しなかったのかと後悔することになる。

10年もの間運命と言う名の歯車は止まっていただけなのかもしれない。

動き出した歯車はとどまることを知らず多くの人を巻き込み加速して行く…

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからよろしくお願いします。

第1話 小っちゃくなっちゃった!

世間を震撼させた黒の組織事件から早10年。

コナンと哀が抜けた少年探偵団はその後も高校生探偵工藤新一の力を借りつつ実力をつけていった。

高校生となった彼らは高校生探偵として有名になっていった。

ここはある館。三人が殺人事件にたまたま遭遇しふたたび事件を解決した。三人が館から出ると報道の記者に囲まれる。

「今回の事件の謎はいつ解けたんですか？」

「今回の推理のポイントは？」

様々な内容の質問が次々記者から飛ぶ。

光彦と元太が自慢げに答えながら館から離れてゆくのをみると歩美はのんびりと歩き出す。

帝丹高校探偵クラブの紅一点である歩美は元太や光彦と違いあまりテレビに出たがらない。新一に言わせるとこれは歩美の親友であった灰原哀の影響らしい。歩美と哀ではテレビに出たがらない理由が大きく違うが…それはともかく歩美は明日の準備をするために家路を急いだ。

次の日…

八色列島 はっしやくしゅう 白桜島 はくおうじま

白桜島は八色列島の玄関口ともいえる島で人口が一番多い。遊園地などの観光施設が多々ある。この島にある遊園地白桜ランドは離島にあるにもかかわらず結構人気のスポットである。少し前に解決した事件の依頼主がこの遊園地のオーナーで事件を解決したお礼に招待してくれたのだ。

歩美が光彦、元太と共に歩いていると黒い服を着た怪しい人を見つけた。

「ごめん！ちよつと行きたいところがあるから行くね！すぐに戻ってくるから！」

と言うと歩美はその男を追いかけることにした。

「…」

黙って歩美の後姿を見ている光彦に元太が

「どつしたんだよ？光彦？」

と話しかける。

「いえ…なんでもありません…。」

と言うと光彦は再度歩美の後姿を見て元太とともに歩き出した。

（なんでしよう…この感じは…まるで歩美ちゃんと二度と会えない気が…。）

などど光彦が考えているのも知らずに元太は次々と屋台で売っている食べ物を食べるのだった。

一方歩美はというと黒い服を着た男を追いかけて人目の付かないような場所に來ていた。

歩美がしばらく見ていると黒い服を着た男と別の男が何らかの取引を始めた。歩美が取引を見るのに夢中になると突然後ろから黒い服を着た長髪の男に殴られた。

「兄貴！こいつは？」

と取引をしていた男が言うのと長髪の男は

「ここそと俺たちの事をかぎまわっていたやつのような……。」
と言った。

「やつちまいやすか？」

と言いながら男が拳銃を出すと長髪の男は

「待て……こんなところでそれをぶっ放したりするのはまずい……だからこれを使う……。」

と言いながらカプセル状の薬を出す。

「それは前の組織が解散する前にシェリーってやつが作った薬ですかい？」

と男が聞くと長髪の男は冷徹な笑みを浮かべ

「そうだ……これなら絶対わからんだろ……死体からは何も検出されないらしいし……。」

と言つとそれを歩美に飲ませた。

第1話 小っちゃくなっちゃった！(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第2話 出会ったのは…

歩美は目を覚ますと体に何か違和感を感じつつなるべくその場から離れようと走り出した。すると角を曲がったところで栗色の髪が印象的な女性とぶつかった。

「いてて…。」

と歩美がいとその女性は

「あなた…大丈夫？」

と話しかけた。

「うん…。」

と言いながら歩美が顔をあげるとその女性は歩美に顔の高さまでか
がんでジーと歩美の顔を覗き込む。

「似てるわね…。」

とその女性が言つと歩美は

「えっ…誰にですか？」

と聞いた。

「そんなわけないわよね…いえ…絶対ないはずよ…。」

と言つと女性は立ち上がって行こうとするがなぜか歩美が気になるらしく再び戻ってくる。

（なんなのよ…この人…。）

と言いながら横にを向くとたまたま横にあつたガラスに自分らしき人物が写っていた。しかし、そこには女子高生ではなく小学生が映っていた。

「えっ…うそ…。」

と歩美がつぶやくと女性は

「何でそんな大きな服着てるの？だばだばじゃない…。」
と言った。

（えーどうしよう…本当のこと言つて信じてもらつしかないのかな

?)

などと考えながら歩美があたふたしていると女性が

「間違つてたらあれなんだけど…あなた…帝丹小学校に通っていた吉田歩美さんじゃない?」

と話しかけた。

「えっなんで…」

となぜこの女性が自分の事を知っているのか驚きながら歩美が言う
と女性は

「やっぱりそうだったのね…薬を飲まされて体が小さくなったんじゃないの?」

と聞いた。歩美がうなずくと女性は

「だつたらついてきてくれる?」

と聞いた。歩美は少し迷つたが結果的にはその女性についていくことにした。

「ねえ…どこかで会つたことある?」

と歩美が女性に聞くとその女性は

「…灰原哀…そう名乗ればわかる?」

と言つた。

「えっ!哀ちゃんなの?」

と歩美が言つと志保は

「ええ…でもそれはあくまであなた達の前で名乗つた偽名で本名は宮野志保よ…。」

と言つた。

「でも…どうして偽名なんて…」

「ここで説明すると長いし面倒なことになるから私の家で説明するわ…。」

と言つと志保は歩美と共に遊園地の外へ出ていく。

歩美が志保についてしばらく歩いていくと大きな屋敷に着いた。

「ここが私の家よ…。」

と言つと門を開けて中に入つて行く。

「すごい……。」

と歩美がつぶやくと志保は

「工藤君の両親に譲つてもらつたのよ……私はいいつて断つただけど……。」

と言いながら奥へ入る。歩美は興味津々であたりを見ている。これほどの屋敷を譲つた工藤と言つ人物は何者なのかと気になって来るぐらいである。

「この部屋よ……。」

と言つと志保は歩美をある部屋に通した。

第2話 出会ったのは…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第3話 哀の正体

歩美が部屋に入るとたくさんの薬品が棚に並んでおり志保は椅子に掛けてあつた白衣を着た。

「それで…どこら辺から聞きたい？一応薬の事を大体わかるわ…。」と志保が言つと歩美は

「それじゃあ…何で哀ちゃん…じゃなくて志保さんは偽名使つてたの？」

と聞いた。すると哀は

「…いきなりいたいとこついてくるわね…偽名を使つていた理由はあなたと同じように私が幼児化したから…幼児化の原因はAPTX4869と言う薬よ…ある組織の科学者が開発したものでこの薬の細胞破壊プログラムの偶発的作用で体の神経系を除く骨格、内臓、体毛を幼児期まで体化させる神秘的な毒薬…と言つたところかしら…ちなみにこの薬を開発した科学者は組織内でのコードネームはシエリー…そして本名は宮野志保…つまり私よ…。」

と答えた。

「えっ！哀ちゃんが！」

と歩美が言つと志保は

「ええ…それと…解毒剤なんだけど…まさかこんなことになるなんて思つてなかったから解毒剤はおるか薬のデータも残つてないのよ…。」

と言つた。

「それじゃあ…。」

と歩美が言つと志保は

「…悪いけど…あなたには私たちと同じようにもう一度小学校に通つてもらつことになるわ…。」

と言つた。

「それじゃあ…相手がどんな人たちかわからないから偽名使つて生

活するのかな？」

と歩美が言くと志保は

「…そういうことになるわ…どうする？名前…。」

と聞いた。すると歩美は

「うーん…そうだ！灰原茜^{あかね}ってどう？」

と言った。

「灰原…茜？それでいいの？」

と志保が聞くと茜（歩美）は

「うん！」

と答えた。

「…別にいいけど…それじゃあ…ここじゃなんだし帝丹小学校の転校手続きしておくわね…それと米花町に住んでいる私の知り合いのところ行ってもらうわ…。」

と言いながら部屋を後にした。

それから数分すると志保が戻ってきて

「連絡がついたから明日には迎えに来るわ…今日は早く寝なさい…」

来客者用の寝室があるから…。」

と言った。

「分かった…。」

と言って茜が部屋に入ったのを確認すると志保は研究室に戻った。

（…まさか歩美ちゃんを巻き込むなんて…。）

と考えていた。

（でも…いつたいどうしてあの薬が…あの時確かにデータは抹消したはずなのに…どうしてかしら…私のせいよね…歩美ちゃんが…。）

と後悔の念を膨らませていく志保をいくら小学生の体とはいえ中身は高校生の吉田歩美のため眠れなかったので志保のところに行こうとしてた茜がそんな様子に気づいて扉の隙間から見ていた。

「哀ちゃん…。」

と歩美がつぶやくと志保は茜がいることに気付いたのか

「解毒剤は必ず作るから少し待ってて…。」
とつぶやいた。

第3話 哀の正体（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第4話 阿笠博士登場！

次の日茜が起きて今の方へ行くと話し声が聞こえてきた。
(誰かな?)

と考えながらドアを開けるとそこには志保と阿笠博士がいた。

「阿笠博士！」

と茜が言うと阿笠博士は志保の方を向き

「君が預かってほしいって言うのはこの子かね？」

と聞いた。すると志保は

「ええ…さつきも話したけどこの子は歩美ちゃんよ…まっ今使っている名前は灰原茜だけど…。」
と言った。

「しかし懐かしいの…。」

と阿笠博士が言うと志保は

「とにかく…この子のことよろしくね…学校はもちろん帝丹小学校…。」
と言った。

「それで…誰に伝えておくんじや？茜君の正体を…。」

と阿笠博士が言うと志保は

「そうね…やっぱり両親にぐらいは知らせておいた方がいいわね…

工藤君には私から説明しておくわ…。」
と言った。

「わかった…。」

と言うと阿笠博士は茜と共に志保の家を後にした。

志保は阿笠博士と茜が去ると新一の家に電話をした。

「もしもし…工藤ですけど…。」

と相手が出ると志保は

「私よ…。」

と言った。

「宮野か？」

と新一が聞くと志保は

「そうよ…。」

と短く答える。

「お前から電話なんて珍しいな…何かあったのか？」

と新一に聞かれると志保は歩美のことについて説明した。それが終わると新一は

「歩美ちゃんがね…歩美ちゃんに薬を飲ませたやつらについては俺も探してみるけど…あんまり自分を責めたりするなよ。」

と言った。

「えっ？」

と志保が言くと新一は

「どうせおめーの事だから自分のせいだとか言っただけで落ち込んでたろ？また現実から逃げたりするなよ？」

と言った。

「…わかっているわよ…とにかく私はもう一度解毒剤を作ってみるわ…それと時間的に今日中にはそっちに行くと思うから…名前は灰原茜よ…それじゃあ…。」

と言くと志保は電話を切った。

(逃げたりするなよか…そうよね…現実から逃げちゃダメよね…。)と考えながら志保は地下の研究室へ入って行った。

船から降りてそこからまだ本当の小学生だった頃キャンプなどに行くため元太や光彦、コナン、哀と共に乗った黄色いビートルで米花町へ向かった。

「それで…歩美君…これからどうするのかね？」

と阿笠博士が言くと茜は

「どうするって？」

と聞いた。

「これからもう一度小学校に通うことになるんじゃないけど…。」
と阿笠博士が言いだすと歩美は
「大丈夫だよ…友達も作るしちゃんと学校通うから…もちろん私の体を小さくした黒ずくめの男も追うよ…。」
と言った。
「そうか…。」
と答えると阿笠博士はふたたび無言で車を運転する。

しばらく走ると車の窓から見える風景は見慣れたものへなっていた。
「もうすっかり暗くなっちゃったね…。」

と茜が言うと阿笠博士は
「そうじゃな…哀君の家からここまで結構距離があるからの…もう少しでわしの家に着く…。」
と答えた。

「ところでさ…何で哀ちゃんはあるんやん？別に米花町（米花町）にいてもよかったのに…。」
と歩美が言うと阿笠博士は
「それはじゃな…10年前…一旦組織が壊滅して薬の解毒剤が完成したときの話なんじゃが…。」
と言つと10年前の出来事を話し出した。

第4話 阿笠博士登場！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第5話 10年前のある日

車を運転しながら阿笠博士は10年前の事を語りだした。

10年前…

組織が壊滅してからもう1ヶ月が立とうとしていた。組織が壊滅して薬のデータが手に入って以来哀は学校にも行かず地下の研究室の中にこもっていた。

「哀君：あまり無理せん方が…。」

と阿笠博士が話しかけるが哀は

「無理なんかしてないわ…あともう少しなのよ…。」

と言うとコーヒーを持ってふたたび研究室へ行ってしまふ。そんなある日哀のことを心配したコナンが阿笠博士の家に来ていると哀が出てきて

「あら…工藤君…ちょうどよかったわ…完成したわよ…解毒剤…。」

と言った。

「ほんとうか！」

とコナンが言うと哀は

「ええ…ただし！この薬が完璧なんて保証はどこにもないから大体

…1ヶ月は私の監視のもとここにいてもらっわ…。」

と言った。

「えー」

とコナンが言うと哀は

「まったく…別にどっかで勝手に苦しんで死にたいならそれでいいけど…。」

と言った。

「わーたよ…それじゃあ阿笠邸でおとなしくしてるからさっそく…。」

「

とコナンが言うと哀は

「バカね…あなたは確かに高校生の工藤新一だけど小学生の江戸川コナンでもあるのよ…小学生の男の子が突然消えたら大騒ぎになるじゃない…だからきつちり江戸川コナンが消える段取りを取ってからね…まああなたのお母さんの有希子さんに協力してもらってうまくこの町から引越したことにしとかないとね…私は私でうまくやるわ…。」

と言った。

「それじゃあちょっと母さんに電話してくる…。」
と言つとコナンはその場を去って行った。

「ほー哀君もとの体に戻るのか…。」

と阿笠博士が言つと哀は

「ええ…それでもってこの町を出ていくつもりよ…。」
と言った。

「どついつことじゃ！別にここにいってもいいんじゃないぞー！」

と阿笠博士が言つと哀は

「…確かに米花町（この町）は暖かくて住みやすいわ…でも…蘭さんや吉田さん、円谷君、小嶋君もみんな待ってるのは宮野志保じゃなくて灰原哀よ…それに…。」

と言った。阿笠博士が

「それに？」

と聞くと哀は

「…別になんでもないわ…。」

と答えて研究室の方へ行つてしまった。

「それから3ヶ月がたつて哀君は引越したわけじゃ…そうはいつでもあの場所に引越したのは割と最近じゃがな…。」

と阿笠博士が言つと茜は

（もしかしたら…哀ちゃん（コナン君）は新一さんの事が好きだったのかな…。）

と考えながら

「そうなんだ…。」
と答えた。

「もうすぐわしの家じゃ…きっと新一が待っておる…。」
と阿笠博士が言つと茜は

「うん！」

と元気よく答えた。

第5話 10年前のある日（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第6話 帝丹小学校

米花町に到着した茜は新一と少し話した後眠りについた。

「新一：一応茜君の転校の手続きが終わったぞ…。」

と阿笠博士が言うと新一は

「ああ…。」

と短く答える。

「どうかしたのか？」

と阿笠博士が聞くと新一は

「おかしくねーか？」

と言った。

「おかしいって…何がじゃ？」

と阿笠博士が聞くと新一は

「薬の事だよ…確かに薬のデータは抹消した…仮に漏れがあったとしても宮野の話が正しければそう簡単には作れないはずだ…と言うことは今回歩美ちゃんに薬を飲ませたやつらがあの組織と同じように巨大である可能性が否定できない…。」

と言ってからさらに

「だがそうなる…なぜ10年も経っているにもかかわらず薬の開発が進んでいないのかと言う疑問も残る…つまり今考えられるケースとしては何らかの形でAPT X 4869そのものかデータが残っていてその組織がそれを手に入れそれをもとに作った場合…ただ歩美ちゃんが言うには薬を飲まされるときに男が「前の組織」と言ったことを考慮するとおそらくあの黒ずくめの男たちと何か関係があると考えた方がいいな…。」

と言った。

と阿笠博士が言うと新一は

「歩美ちゃんをあんまり深入りさせないようにした方がいいかもし

れない…この件は俺が何とか調べてみる…。」
と言い残し阿笠博士の家を後にした。

次の日…

ここは歩美がかつて通っていた帝丹小学校。転校してきた茜の担任になったのはかつて帝丹小学校で1年生だった時に担任だった小林先生であった。もっとも今は吉田歩美として帝丹小学校に通っていた時に恋人の関係になった白鳥任三郎と結婚して白鳥澄子になっているが…。ともかく白鳥先生について廊下を歩き1年B組の扉を開ける。

「みなさん席についてください！」

と白鳥先生が言うとおっちこっちで話をしていた子供たちが席にいた。それを確認すると白鳥先生は

「今日は転校生を紹介します…。」

と言いながら茜を前の黒板の前に立たせて黒板に「灰原茜」と書いてから

「今日からみんなと一緒に勉強することになった茜ちゃんよ…みんな仲良くしてね。」

と白鳥先生が言うところクラスのみんなは

「はい！」

と元気よく答えた。

「それじゃあ…茜ちゃんの席は…コナン君の横があいてるわね…。」
と言いながら白鳥先生は教室の後ろの方の席を見た。茜がそつちを見ると一番後ろの窓側の一番日当たりがいい席に新一と蘭の息子である工藤コナンが寝ておりその横の席が空いていた。茜はその席のところに行くと阿笠博士がいつの間にか用意していた新品のランドセルから用具を出して机の中に入れると寝ているコナンに

「よろしく…。」

と声をかけてから椅子に座った。

かくして灰原茜として第2の小学校生活が始まったのである。

第6話 帝丹小学校（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第7話 子供たちの探偵団

さて…白鳥先生が授業している間、茜は結局コナンと共に寝ていた。授業が終わると茜は帰り支度をして帰ろうとしていたが

「ねえ…茜さん…。」

と後ろから誰かに話しかけられた。

「誰？」

と言いながら茜が振り向くとそこには一人のポニーテールの女の子が立っていた。

「ごめんごめん…突然話しかけて悪かったな…私は服部優子ゆいゆうねんよろしくな！」

（そうだった…そういえば平次さんと和葉さんの子供も平次さんの仕事の都合で東京とうきょうに引っ越してきて帝丹小学校通ってたけ…。）

と茜が考えていると優子が

「どうかしたの？」

と話しかけた。

「うっうん！なんでもないよ！」

と茜が言つと優子は

「そう？ならええねんけど…。」

と言つてから少し間を置き

「そうだ！私とコナン君で少年探偵団やってんねんけど茜ちゃんも入ったらどうや？」

と提案した。

「いいわよ…。」

と茜が返事をすると優子は

「ほんまか！それじゃあコナン君に話してくるわ！ここで待って！」

と言つて走り去って行った。

（探偵団か…懐かしいな…。）

と茜が考えている間に優子がコナンを連れてきた。

(来るの早っ！)

と茜が考えていることなど知るよしもなくコナンが

「俺は工藤コナンだ！よろしく！」

と言った。

「私は灰原茜…よろしく…。」

と茜が言うとコナンは

「そういえば…茜ちゃんってクラスどこなんだ？」

と聞いた。すると優子は

「もー！コナン君ずっと寝てるからそうなるんやで！今日うちのク

ラスに転校してきたんや！」

と言った。

「そうなのか！？まったく気づかなかった！」

とコナンが言うと優子は

「まったく…。」

と言いながらため息をついている。

「とつとにかくよろしくね…。」

と茜が言うとコナンと優子は

「ああ…。」

「こちらこそよろしくな！」

とそれぞれ答えた。

「今日は私帰るね…また明日！」

と言うと茜は阿笠博士の家に向かった。

茜が家に帰ると阿笠博士が

「どうじゃった？久しぶりの学校は？」

と話しかけた。

「うん！ちよつと授業が暇だったけど楽しかったよ！それと…また

少年探偵団やることになったの！」

と茜が言うと阿笠博士は

「探偵団と言うと…」「ナン君や優子君がやっってるあれか…。」
と言った。

「そうだよ！」

と茜が答えると阿笠博士は

「そうか…。」

と言った。

「どうかしたの？博士…。」

と茜が聞くと阿笠博士は

「いや…なんでもない…そうじゃった！さっき新一が来ての…。」

と阿笠博士が話し始めると茜は

「待って…ちょっと聞きたいことがあるんだけど…。」

と言った。

「聞きたいこと？」

と阿笠博士が聞き返すと茜は

「うん…いいかな？」

と聞いた。

「別にいいが…。」

と阿笠博士が答えると茜は聞きたいことについて話し始めた。

第7話 子供たちの探偵団（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第8話 茜の疑問（前編）

茜はキッチンでコーヒーを入れるとソファアームに座り

「…コナン君のことなんだけど…もちろん今私と同じクラスになっている工藤コナンじゃなくて江戸川コナンの方よ…。」

と前置きしてから

「もしかしたら…江戸川コナンと工藤新一は同一人物じゃないの？
哀ちゃんにはちょっと聞きづらかったけど…博士なら知ってるんでしょ？」

と言った。

「それはのう…。」

と阿笠博士が言うと茜は

「別にいいでしょ？私に隠すことないんだから！」
と言った。

「まあ…そうじゃよ…。」

と阿笠博士が答えると茜は

「やっぱりね…。」

と言った。

「やっぱりと言つと？」

と阿笠博士が言うと茜は

「ずっと疑問だったのよ…何でコナン君と哀ちゃんがあんなに大人びていたのかって…これでやっとわかったわ…。」

と言った。それから少し間を開けて茜は

「それじゃあ…新一さんと哀ちゃんは組織と対決したりとかはあったの？」

と聞いた。

「ああ…確かにあった…。」

「どんな感じ？聞かせてよ！」

「そうじゃなあ…まずは江戸川コナンと言う人物が誕生したところ

からじゃな…。」

阿笠博士は立ち上がり窓の方に立った。

「あれは…10年前…まだ新一が高校生探偵として名をはせていたころじゃ…歩美君は10年前にトリピカルランドで起きた事件を知っておるか？」

と阿笠博士が聞くと茜は自分の記憶をたどりだす。

(10年前…トリピカルランド…)

茜は考えをめぐらすがまったく思い当たらない。

「覚えていないか…無理もないか…その時歩美君は小学校の1年生じゃったからな…この事件の発端は10年前にトリピカルランドのジェットコースターで起きた殺人事件からじゃ…新一はこの現場で歩美君たちにあつたといっておつたが…ともかくこの事件は新一が解決した。問題はその後じゃ…新一は事件が解決した後現場にいた黒ずくめの男たちを追つたんじゃ…それがいけなかつたのかの…新一は男たちの取引現場を見てしまい薬を飲まされ幼児化した…。」

と阿笠博士が言うとき茜は

(なんだか私と同じ感じた…。)

と思つていた。

「それからは帝丹小学校に転校生と言う形で入り組織を追つていた…彼が小学校でどうしていたかは歩美君の方が知っておるじゃろ…それからしばらくしてわしの家の前に女の子が倒れておつた…それが哀君じゃ…まあ最初哀君が組織の人間だと知つた時新一はかなり警戒しておつたがな…まああんなことやつた哀君も哀君じゃが…。」

と阿笠博士が言うとき茜は

「でも…何で哀ちゃんが阿笠博士の家の前に倒れていたの？」

と疑問を口にした。すると阿笠博士は

「それに関しては…。」

と話し始めた。

第8話 茜の疑問（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885z/>

離れ行く三人

2011年12月29日14時49分発行